

本の紹介

『満洲国の話』

が刊行されました

藤川琢馬（会員）

満洲国の話

古海建一

満洲国の各分野の活動を横断的に俯瞰し、
その実像に迫る。

政治を中心に扱う満洲国研究書が多いなか、本書は
経済、産業、金融、鉱工業、インフラなど多角的に分析、
満洲国の全貌を立体的に照らし出す。さらに関係者らの回想を収録し、
史料価値も高い。12歳まで満洲国で過ごした著者が
国際善隣協会で行った連続講話を拡充した渾身の書。

定価2530円

（本体2300円＋税10％）

「満洲国」に関心を寄せる国際善隣協会の会員にとっては、待ち望まれた『満洲国の話』の本が5月に刊行されました。遡りますと、協会の東北委員会が主催して2019年9月にスタートした、本協会元会長古海建一氏による連続講話「戦争の時代、そして満洲国を振り返る」が出发点でした（善隣古海塾と称しました）。満洲国、新京（現長春）で生まれ育った古海氏ご自身の立ち位置から、また数少なくなつた満洲体験者として、3つの戦争（満州事変、日中戦争、太平洋戦争）のすべてに絡んだ満洲国の歴史を振り返ることは、望まれた企画でありました。古海塾は毎回40名前後の参加者を得て好評に回を重ね、2020年コロナ禍により中断を余儀なくされましたが、2023年10月の第26回をもって終了しました。

その際聴講者から、このままではもったいない、ぜひとも成書として残してほしいという要望があり、古海氏はすでに90歳を超えたご高齢でしたが、改めて資料の整理、原稿の執筆に

着手されました。本書は満洲国に関わ
りが深い16話分の内容が下敷きとなっ
ています。この折私は当時の会長から
の要請もあり、本の制作に若干のお手
伝いをさせていただいたことで、本欄
のご案内を申し上げることとなりました。

本書では、満洲国の政治など特定分
野の問題に限らず、経済、産業、その
他一つの国を構成するうえのさまざま
な分野が扱われています。各分野を多
岐にわたって扱った書物としては『満
洲国史』（満洲国史編纂刊行会）が知
られています。研究以外にとって
は大著に過ぎません。本書では満洲国の
経済とやらで国際収支や大東亜金融
圏制度までの問題を扱っていますが、
著者の専門的履歴からして本書の特徴
の一面と言えるでしょう。

読者にとってややほっとすること
に、協和会（満洲国協和会）の歴史の
ある時期、農村支援のための協和会活
動の記述があります。しかし日本の戦
局の悪化によって、協和会は日本国へ
の戦時協力体制へと転換してしまいま

す。前述の経済や産業においても日本
国に従属せざるを得なかったと同様、
満洲国の限界であり、そもそも建国の
目的であったとも言えることができ、基
本的に矛盾を抱えた満洲国でした。

読者にとってもっともほっとするこ
とは、社会インフラの整備に費やされ
た努力と実績ではないでしょうか。道
路・鉄道・都市建設などにおける、日
本の水準を上回るインフラ整備、教育
の近代化、科学技術の振興、医療行政
の確立などへの注力は並大抵ではな
く、これらのインフラは後世に引き継
がれたはずで

著者はアヘン専売についても触れて
いますが、なお説明が求められる領域
です。国策に基づいた結果多くの悲劇
を生んだ満蒙開拓団は、駒澤大学教授
加藤聖文氏にお願いした講話でした
が、本書への寄稿もいただきました。
氏の著作『満蒙開拓団』（岩波現代文
庫）にありますように、「国策」とい
うものの本質は現代にあっても変わら
ないと氏は指摘しています。

本書は敗戦時の混乱と引揚げ実現の

記述をもって終了しますが、これらの
状況は当時小学校6年生であった著者
に強い印象を与えたに違いなく、本書
の成立にもなんらかの影響を及ぼして
いるでしょう。著者は「あとがき」
で、満洲国とは何だったのだろうか
と、建国精神「王道楽土」と「五族協
和」について考察しています。この旗
印も矛盾を抱えたものではありません
が、一身を捧げる覚悟で民生の安定や
国づくりに邁進した多くの人たちがい
たことは、記憶にとどめておきたいこ
とです。

本書では先人たちによる回想録も多
く引用され、講話のなかにあったいく
つかの話題は独立した「コラム」とし
て詳述されました。本書によって、満
洲国とその時代への理解が深まること
でしょう。

『満洲国の話』古海建一著

発行 中央公論美術出版

四六版352頁

定価 2,530円（税込み）